

Triumph onedollar ～勝
利への放浪者～

リューヤ

第零話「プロローグ」

「・・・・・・・・？」

暗い。

ここは何も見えない程暗い空間。いや違う、視界だけはバカにはっきりとしている。自分の手を見ればその手が明りに照らされているようにはっきり見える。体も、服もそうだ。

辺り一面、まるで黒いインクで隙間なくベッタリと塗りたくられたような空間だ。

何なんだここは、というか、何でこんなところにいるんだ？・・・・・・・・わからない。

そこに、天井からパッと一筋の光が差し込んだ。光に照らされているのは、一人の青年だった。黒いスーツを着込んだ彼は椅子の上に足を組んで腰かけ、眠っているかのように目を閉じている。

時間が経つと青年は、ゼンマイ仕掛けの人形のようにゆっくりと目を開き、こちらの存在に気がついた。彼の薄く光る瞳と目が合うと、うっすらと笑みを浮かべた。

「・・・・・・・・こんにちは。このような所に人が訪れるなんて珍しいですね、歓迎しますよ。...私ですか？フッフ、名乗るほどの者ではないですよ。どうしても呼ぶのであれば、「語り部さん」とでも呼んでください。」

語り部と名乗る男は眼を細めると、まるで感情の存在しない、本当の人形のように笑って見せた。

「私は今まで、ここでとても退屈な時を過ごしていました。ここで出会ったのも何かの縁です、よかったら少し私のお話につきあってはくれませんか？」

その冷たい笑みに戸惑い一瞬迷ったが、ここはとりあえず首を小さくではあるが縦に振っていた。

「そうですか、ありがとうございます。そうですねえ、どんな話をしましょうか・・・・・・・・？そうだと、こんなのはどうでしょうか。」

語り部は何かを思いつくとおもむろにパチンと指を弾いた。すると暗闇の中にもう一つの新たな光が差し込んだ。光が照らしているものは、見たこともない分厚く、丸い板きれの様なものだった。よく見てみれば、その板切れの表面には、円を描くように六つの窪みが存在していた。それぞれボール一個分の窪みだ。他にも一つ、中央に囲まれるようにおできの様な突起がある。

「これが何か解りますか？・・・・・・・・そうですよね、初めて見るのだから解るはずがないですよね、

失礼しました。これは、これからお話しする物語の、言わば扉の様なものであり、鍵の様なものでもあるんです。ゆっくり説明して差し上げましょう。こちらに椅子と飲み物もあるので、どうぞゆっくりしてってください。」

第一話「選考会」

物語の始まりは、「4 大大陸」のひとつ、「ラプチナ大陸」の首都「モリオン」の城で起こった。

ある日、城に一人の商人が現れ、「ラミエルの天盤」なる宝飾の施された品物を献上した。何でも、古代の王族が使っていたであろう「占いの道具」のようなものらしい。妙に気に入った国王はこれを高値で取引した。その後天盤は国王の部屋の壁に飾られることとなった。

それから数日後、奇妙な事件が起きた。国王の部屋に飾られていた天盤が、突如光を放ちながらどこかへ向うように中を漂いだしたのだ。それを目撃した者はしばし呆然としていたが、一人の兵士がそれを止めようと天盤に触れた瞬間、全身に電撃を浴びせられたようか衝撃に襲われ、天盤はそれを境にピタリと動きを止め床に落ちてしまったと言う。兵士は手に大きな火傷のような傷を負い、3日間意識を失ってしまった。

これを聞いて気味悪がった国王は、大陸から考古学者と高名な魔術師を呼び寄せてこの天盤について様々な視点から調べ上げさせた。

それから数ヵ月後、調査を進めていた二人からついに情報が届いた。

これは、占いの道具などではない、「魔具」だった。

この天盤には何か強力な「魔力」が封じ込まれている。おそらくその魔力を開放させるのは、この天盤の周囲に開いている6つの穴に関係するそうだ。それが何なのか調べた結果、この穴にはそれぞれ6つの宝石が「鍵」として埋め込まれると言うコトはわかった。

1つはルビー、1つはサファイア、1つはトパーズ、1つはエメラルド、1つはダイヤモンド、1つはオニキス。それぞれが、世界中のどこかに封印、または祀られたり、はたまたその辺に落ちていたりしているそうだ。

これを知った国王は、この天盤にはどのような力が封印されているのか非常に強い興味をもった。そこで国王は、その「鍵」と呼ばれる宝石を集めるべくラプチナ中から調査隊員を募集することにした。

『急募！ラブチナ王国公認冒険者募集』

トレジャーハントや強さに自信のある者、冒険に興味のある者は○月×日までにラブチナ城まで参られたし

尚、募集人数が多かった場合はこちら側で選考会を開くものとする

この選考会に合格し、国王の命を果たした者には褒美として金500万L（ライト）を進呈する』

ラブチナ城の周辺に生い茂る森を南に抜けた先に小さな村がある。村の名は「クリスタル」。周りには山と大きな河があり、おもに山菜や魚を売って生計を立てているととてもどかな村だ。ぶっちゃけ、クソド田舎村。

そんな村の広場の真ん中に、そんなことをデカデカと書いた立て札が城の使いによって取り付けられていた。そんな立て札を見に、村人の数人が集まってきていた。

「ハウ、冒険者ねえ...そんなことするような暇人いんだべか？」

「スラねえスラねえ。んなことよりこの立て札、上等な木を使ってるべ。薪にでもして売っちゃまうべし」

立て札は怯えている。

田舎の人間は至極呑気なことを言いながらとうとう立て札に手をかけ渾身の力で引き抜こうとした。

丁度そんなところへ、また新たな村人が集団の中に割って入ってきた。

「ま～た何やってんだお前さん達は！？」

腹に響くようなドスの利いたその声に、一同は真っ先に誰だかわかった。あごひげを少し伸ばしたダンディズムな顔立ちに、鍬を肩に担いだこの男は、この村の村長だった。

「あいやま、村長でねがい」

「いやね、この板っ切れ薪に変えたら高く売れんでねがなって話ったとこですだよ」

「板っ切れ？」

村長は片眉をピクリと吊り上げると、野次馬気分で立て札に書いてある文字を読んだ。

とたん、村長は両目を限界までカッ開き、額に太く血管を浮かべると、手にしていた鍬を放り投げ立て札を気合一発で引っこ抜くと、立て札を担いでどこかへ走り去ってしまった。この間、わ

ずか4秒。

「...どこ行ったんだべ？」

「まだ息子さんの所でないんがい？」

「つくづく災難な息子さんだなあ...」

所変わり、ここは村長の家。家の中には生活に必要な最低限の家具と農具しかない、見ているとなんとか寂しい気分になりそうな家である。

そこに一人、テーブルの上に両足を放りだして椅子に座りながら器用に読書に勤しんでいる者がいた。顔は本に隠れてほとんど見えない。彼はおもむろに片手を伸ばすと、皿にのせられたピーナッツを一つ摘まんで口の中に放り込んだ。この静かな空間には、本のページをめくる音とピーナッツをかじる音しか存在していない。

そして今、その静かな空間を邪魔する音が、玄関の外から近付きつつあることに、すでに察知している。あの走る音とあの叫び声、間違いない。

彼は葉を挟んで本を閉じると、じっくりと耳の感覚を研ぎ澄ませてタイミングを計った。あの足音が玄関の前まで来た瞬間、彼は本をまるでボールのように座ったままドアへ向けて全力で投げた。

とたん、扉は開かれ、開けた張本人は第一声を放つ前に計算し尽くされたタイミングで顔面でこれを受けた。しかもぶつかった本はハードカバーの厚物、これは痛い。

ハードブックススペシャルをクリーンヒットで受け止めは男はその場で天を向くように倒れ、投げた張本人は別の本を読みにかかった。

「アギ・・・何をする、ジン」

「いや、なんか条件反射的に。またなんか下らねえ話題オレに押し付ける気だと思ってよ」

青年は澄まし切った表情でそう言い切った。

本で隠されていた青年の顔立ちは、意外と整っていた。肩まで届くかな？と思うくらいの黒髪ストレート、下半分までのハーフフレーム眼鏡をかけた瞳は赤紫色のツリ目。

この青年の名は、「ジン・K・ジェイド」という。この町に住んでいる少ない若者の一人で、現在22歳。今ブツ倒された村長の一人息子である。(Kはミドルネームでカイト)

「やかましいわい！！大体何が下らない話題だ！？私はお前のそのグータラした性格を直してやろうと思ってあちこちから色んな仕事を見つけてきてやってきているというのに……。何で、それを、どうして！？片っ端から断ってしまうんだコラ！！」

「じゃかしいのはどっちだよ。誰がどんな生活しようが、それこそ人の勝手だろ？」

ジンは親の期待と願いをことごとく破壊するような発言を残すと、さっきの本を取り返してまた読書モードに突入し出した。その姿を見た父親は、どんどん頭部に血管が浮き出し、沸騰したヤカンよりも真っ赤に怒りの赤に染まった。……。あ、今血管が一本切れた。血がいっぱい出てる。

こここのところ医者に高血圧だから気をつけろと言われているのだが、村長は特に不摂生な食生活をしている訳では決してない。全ての原因は、このバカ息子のこの態度にある。昔一度だけ血圧が200を超えたことがあった。あの時は村民全員に入院を本気で進められたが意地でも入院することはなかった。今日の血圧はいくつまで上がるだろうか？

「いいジン、今日という今日こそはこの仕事に就いてもらうぞ！見ろ！！」

父親はジンの本をひったくると、さっき引っこ抜いてきた例の看板の広告をジンの目の前に叩きつけた。めんどくさそうに眼鏡の位置を直し、ジンは一応その看板の文字に一通り目を通して見た。

んがしかし……

「冒険者…？マジ下らねえ」

「またそれか！？いい加減にせんか、またそんな一言だけで全て終わらせる気か！！？」

「あーそーよ、何か？」

ジンはそのままそっぽを向いてしまうと、開いた本を顔に乗せてお昼寝モードに突入した。本人は何が何でもこの仕事に就く気は微塵もないらしい。

その姿を目の当たりにされた父親は、自分の体内に存在していた全ての『我慢』というストッパーが音を立てて、と言うよりむしろ爆発するように破壊されてしまった。この瞬間ジンを見つめる瞳が曇り、鬼のような荒い光を放つ瞳へ変貌した。

ジンはゆっくりとあくまでマイペースに眠りの世界へ誘われ、あとほんの数回呼吸をすれば完全に夢の中へ引きずり込まれようとするところだった。

するとそこへ、安らかな睡眠を妨害するジャラジャラといった激しい金属音が鼓膜を激しく刺激し、それと同時に体全体に冷たい感覚と食い込むような激痛がまとわりついてきた。

これは何事かと思い本を顔から剥がして確認すると、ジンの体は今座っている椅子ごと頑丈な鎖でぐるぐる巻きにされているのではないか。鎖の先端は、激しい怒りを漲らせこちらを上から見下している親父が握っていた。

「イテテテテッ！いきなり何すんだクソオヤジ！！」

「もうこうなったら強行手段だ！！お前には何が何でもこの仕事に就き、選考会があるならそれに合格し、誇りを持ってこの国代表の冒険者となって旅をしてみようぞ、ジン！！！」

そう言うなり、息子の言い分を聞くことなく鎖を引っ張りながら外へ出た。鎖で簧巻きにされたジンは椅子ごと床に倒れ、そのまま引きずられる形で親父と共に家を後にした。

村の地面はでこぼこしており、時折ひっくり返ったり顔を引きずられたり散々だったが、一番痛かったのはこの様子を離れた場所から見ていた村の民衆の冷たい目だった。

はたから見れば・・・まさに...・その、なんというか

「市中引き回しの刑かこらあああ！！イデデデデデデ！！！」

あ、そうそう。それぞれ

村から城までの距離はおよそ1kmちょい。決して遠くはないがその道中は森を通り過ぎる必要がある。森の中を、まるで捕らえた熊を持って帰るように鎖で引きずりながら歩き続けた。この程度の距離、山育ちであるこの男にはなんてことのない距離なのだが、捕らえられた熊状態のジンは、すでに虫の息だったことにはまるで気が付いていない様子だった。

息ひとつ乱すことなくとうとう城の前までたどり着くと、さっそく目の前に立っていた門番に看板を見てここまで来たことを説明しだした。

「ひとつ、よろしくお願ひします」

「はあ…。それで・・・どっちがですか？」

門番は力強く語った父親と、白目をむき始めている気絶したジンとを指差して見比べた。

「こっちのバカ息子です。」

「は、はあ……。それでは直接話がしたいので、その…鎖を……」

「…？ああそうか、忘れるところだった」

父親はようやく息子を封じ込めた呪縛を解くと、ぐったりとしたままの息子を放り投げて門番へよこした。ジンの体にも服にも、鎖で締め付けられた跡がくっきりと生々しく残されていた。相当な力で締め付けられ続けていたのであろう。

父親は息子を渡すだけ渡すと、あとはそのまま鎖をたたんで帰ってしまった。このあまりにもデジャラスな出来事に、門番はただひたすらに苦笑いを浮かべる他なかった。

気がついた時始めに見たものは、何所かとも知らない見知らぬ天井だった。ベットから起きると同時に声を掛けてくれたのはあの時父親と話していた門番だった。軽く話を聞けばもうここは城の中で、その中の医務室であることを教えられた。

今はひたすらに全身が非常に痛み、一瞬立つことさえも億劫となり門番の手を借りてようやくベットから立ち上がった。また会ったらあのクソオヤジを同じ目にあわせて夜は木に一晩中ぶら下げちゃる計画を胸の奥に誓った。

しかしここまで来たからには仕方ない。その選考会とやらにさっさと参加して失格になってしまおう。

歩くのも少しひどかったので門番の肩を借りながら長い廊下を歩き始めた。その途中、選考会についての話もきかせてもらうことにした。

「えっと、君が募集に参加した理由……は置いといて、とりあえず希望する職業だけでも聞いておこうか」

「職業？」

「立て札をしっかりと裏まで読んでいないようだね。募集者は剣士、戦士、僧侶、魔術師、その他応用の5つの職号から一つ選んで選考会、オーディションを受けなきゃならんのだ」

もちろんそんな話、ジンは聞かされてなどいなかった。正直物凄く帰りたいのだが何もせずに帰るとまた鎖で簀巻きにされてしまいかねない。仕方なしにジンは、一番自分にとってまともそうな剣士を選択した。

「剣士だな。えっと確かこの選考会は・・・」

門番は手元にあるファイルに目を通しだし、現在の状況をチェックした。

「やっぱりもう始まっているなあ…。少し急いだ方がいい」

「マジすか？」

「うん、こっちに急いでくれ」

この城の中には、この日のために作られた特設のコロシウムが存在している。このコロシアムの周りを取り囲むのはオーディションを見に来たラプチナ中の暇をしている国民衆たちだった。城下の村人はもとより、立札のうわさを聞きつけてわざわざ遠くから遠路はるばる訪れた者、様々だ。

コロシアムの中央では、ストライプのYシャツにサングラスという異様ないでたちの男が、マイクを片手に叫びあげていた。

「さア御観衆の皆さん、予想外の大変な事態に追い込まれてしまいました！なんと、36人もいました剣士のオーディション参加者が、たった一人も合格することなく閉幕しようという危機に陥ってしまいましたあ！！一体これからどうするといのでしょうか！？そして我が国の国王は、なぜこんなにも無茶苦茶なオーディション内容を採用してしまったのでしょうかあ！！？」

男は拳を固めながらそう語ると、爪の伸びた不清潔な指を立ててコロシアムの北側特別観戦席、今まさに国王が座って観戦している席をビシィ！と音が出そうなほどの勢いで指差した。国王自らがここで選考会の様子を見守っているわけなのだが、当の本人はあまりにもつまんな過ぎてわざわざまぶたに瞳を描いて誰にもバレないようにこっそり眠っていた。もちろん今も誰にも気づかれていない。バレたら国民の信用はガタ落ちだろうな。

「もうこうなってしまったら仕方がない、残念ながらこれをもちまして、剣士候補者選考会は、終りよ・・・」

『ピンポンパンポーン！』

最後の一言「う」を言い終わるより先に、コロシウム全体に迷子のお知らせのような可愛いチャイムが響き渡った。言いたかったことを途中で遮られたこの男は自分のテンションに反するこのチャイムに崩されてしまい、とても派手にずっこけてしまった。

『え～本部からお知らせします。只今到着した剣士に立候補した選手が一名そちらへ向かっています。担当者は速やかに対処し、オーディションを続行してください。業務連絡を終わります』

伝えることを伝え終わると、もう一度さっきのチャイムが鳴り渡り、会場全体が微妙な空気に静まり返ってしまった。こけた男が上半身を起こして立ち上がると、足元に一通の紙ヒコーキが飛んできた。開いてみると、中にはこれから出てくる選手のカンペが書いてあった。

「え～っと・・・皆さんお待ちください！たった今、もう一人剣士に候補した男が現れました！！えっと、名前前・・・その男の名は、隣村クリスタル出身、

ジンンン・K・ジェイイイイイイイドオオオオオオオオオオ！！！！！！」

全身の血液をカンペ見ながら沸騰させ、ジンの名を叫びあげた途端静まり返っていたコロシウムが、また炎を吹き返した。

コロシム南口選手入場口から、観客に声援を全身に浴びながらジンが入場してきた。腰には二本も剣がぶら下げられている。最初は一本しか渡されなかったのだが、ジンが『多いことに越したことはない』という理由でさらにもう一本拝借して来たという訳である。

ジンは周りの声援があまりにもうるさすぎるので、耳を塞ぎながらあのグラサン男のいるコロシム中央まで導かれた。ちなみにその際、歩いているときのジンの目は死にきっていた。死んだ魚なんて例えでは生ぬるくらい、即死した眼であった。

「いや—どうもこんにちはジン選手、今回のオーディションを合格する自信はどうでしょうか？」

「自信があるとか無いとか以前の問題だ。とにかく帰って寝たい」

「・・・・・・・・」

ジンの真っ正直な意見をマイクが声を拡張させてコロシム全体に聴き渡らせた途端、あれだけ騒いでいた観客全員が一瞬時が止まったかのように停止した。

「えっと……何か会場の皆さんに一言、メッセージなんかを」

「・・・眠い」

「皆さんどうか聞かなかったことにしてあげて下さい！！彼が最後の参加者なんです！！どうか大目に見てやってください！！どうか物を投げないでください！！！」

グラサン男は自分の中の怒りを抑えながら、観客が暴動を起こさないように全力でフォローに回った。当の本人はそれを尻目に大きな欠伸をかいながら緊張感の無さをアピールした。

その後グラサンはジンを置き去りにして駆け足でコロシム奥のアナウンス席に移動すると、別で用意されていたマイクを握って高々に再び叫びあげた。

「それでは改めてルールを説明しましょう！ルールとはたった一つにしてシンプル、戦って勝利するだけです！しかし選手が戦ってもらうのはこの城に所属する兵士部隊の精鋭10人！この数を15分以内に半分以上倒すことができれば、このオーディションは合格となります！！」

グラサンの熱のこもった説明に観客も感化され、あれだけ静まり返っていた空気が再び息を吹き戻した。

選手として立っているジンは、今説明を受けてもなお暇そうに耳をほじっている。

「それでは始まります！！国家認定冒険者剣士部門選考会、レディイイイ・・・」

ゴオオオオオオオ！！！！

選考会開始のゴングが会場全体に轟いた途端、ジンを中心とした東西南北、4方向の門が開かれ門の奥から総勢十人の鎧を着こんだ兵士たちが姿を現した。全員それぞれ剣の他にこん棒ハンマーなど違った武器を所持している。大抵の人間ならこの囲まれた状態だけで竦みあがって、体が動かなくなってしまうところだろう。

しかしジンは全く物怖じすることなく、冷静に周囲を見回しながらどうやって戦ってやったらいいものか考えている。数秒後、血に飢えていた兵士どもが熊のように咆哮を上げながら、それぞれ武器を振りかざして真っすぐにジンの元へ走りだした。危うし、ジン！

「なお、使用される刀剣類に関しましては、刃を潰して斬ることのできない模造刀となっております。決して会場の皆さんが望むようなショッキングな展開にはなりません！例えなつたととしても、最悪骨が折れる程度です！！」

のんきに解説を続けてはいるが、ジンからしたら剣が模造だろうが本物だろうが全く関係なんかない。だいたい数人は刀剣じゃなくて鈍器を所有してるじゃんか、刃関係ないじゃん。10人をまともに相手にしてリンチなんて目に会ったらきつとタダでは済まないだろう。

そこら辺の二流戦士だったらこの状況では逃げるか無作為に突っ込むかの二択だが、ジンはあえてどっちもしなかった。迫りくる兵士の数は左右で4人、そして前後で6人。それを認知してメガネの位置を整えると、ジンは二本の剣を腕を交差させるようにそれぞれの柄を握り、その場に片膝をついてしゃがみこんだ。

観客もグラサンもこの奇怪な行動にどよめきを隠せず、不安にされるようにざわざわした。

正面から一番先にたどり着いた兵士の一人が、本気でジンを殺すような勢いで大きなこん棒を振り下ろした。

・・・その刹那

ヒュンツ！

コロシウムに鋭い風が吹いた瞬間、ジンに襲いかかってきた兵士たちが全員宙を舞った。

ほとんど音もなく、風が兵士たちの武器を一本残らずへし折り、風が全ての兵士たちを吹き飛ばした。

ジンを中心に同心円状に倒れた屈強な兵士たちは、目を回して立ち上がることができなくなってしまった。

当のジンはといえば、片膝をついた姿勢はそのままで、上半身を低く沈めて剣を握った両手を大きく開くように伸ばしきっていた。

コロシウム全体が、まるで凍りついたかのように静まり返りグラサンもアングリと開いた口が塞がらない状況となっている。眠っていた国王も鼻ちょうちんの割れる衝撃で目を覚まし、今いったいどんなことになっているのか状況を把握しようと必死になった。

ジンは何事もなかったかのようにゆっくりと立ち上がると、首を数回コキコキ左右に鳴らしながら剣を鞘に収めた。

その直後、緊張という氷が一気に溶けた会場全体が息をす拭き返し、火山の噴火に匹敵する大歓声を仁へ向けて城中に轟いた。

「な、なななななななななんということでしょううううううううかあああああああ！！？信じられません、夢を見ているのでしょうか！！？あれだけの数の兵士を、たった数秒で、しかも全員、一瞬で決着をつけてしまったああああああ！！なにはともあれ未だに信用し難い真実ながら、剣士のオーディションを合格したのは彼、ジン・K・ジェイドで決まったああああああああ！！！！！！」

コロシアムの観客がいつの間にか自然と総立ちになり、今のジンの戦いに感動して賞賛の拍手と送った。

ジンは入場よりもうるさい拍手に嫌気がさして耳をいつもより余計に塞ぎながらコロシウムを後にした。後にしたのはいいが、ジンはほとんど無意識のうちに兵士をすべて蹴散らしてしまい合格してしまった。これではもう帰るにも帰れなくなってしまうことに気づいたのは、会場を出てすぐにトイレに駆け込み、用を足している最中の時だった。

「・・・・・・・・あ、もう帰れねえじゃんか」

完全自分の防衛本能で無意識にオーディションをパスしてしまったジンは兵士にここ、来賓用の豪華な応接室に連れられた。兵士はこれからここにジン以外に各分野で合格したメンバーが来るからここで待っていてほしいとだけ伝え、ドアを閉めて自分の仕事に戻って行ってしまった。

不本意な結果に頭をポリポリとかきながら、とりあえず仕方なしに目の前にあるソファに腰をかけた。なるほど、さすがは国王御用達の品名だけのことはある。最高の座り心地にわずかな眠気が襲ってきた。

この部屋に設置されたソファは二つ、テーブルを挟んで向かい合うように置かれ、テーブルの上にはおもてなし用に準備されたのであろうお菓子と紅茶の入ったポットとカップがこれから来る人数分置かれている。甘い菓子には興味ないが、ちょうどどどが渴いているのでジンは紅茶に手を伸ばした。

カップの中に粗雑に注ぎ込んだ紅茶は、これまたやはり上等な葉っぱを使用した紅茶で、カップの中で紅茶が波打つたびに上品な甘い香りが鼻腔を刺激した。こういうものを俗に特級葉と呼ぶのかどうかまでの知識は持っていないが、せっくなのでこの紅茶を楽しむことにしよう。

さっそく一杯口をつけると……紅茶は予想以上に熱かった。猫舌なのがジンの唯一の弱点である。

紅茶には悪いかもしいないが、このままでは飲めたものではなく、仕方なくその場にしばらく放置して覚めてからまた飲むことを計画すると、今入ってきたドアが開いてだれかが入ってきた。

濃い茶髪に額にバンダナ巻き、顔には横断するような大きな一本傷、七分丈のシャツに上着の腰巻、そして何本ものベルトでぐるぐる巻きに固定されたブーツといういでたちだ。これを見たジンの第一印象は、

「……変な奴」

男は兵士と二言三言話をすると、テーブルの上に置かれた菓자에気が付き瞳を宝石のように輝かせた。

「あああ！うまそうなもの発見さー！！」

男は駆け足でテーブルへ迫り、一番手前にあった菓子をひとつ摘んで口の中に放り込んだ。口の中で二三度咀嚼すると、そのあまりの美味さに恵比寿もつられて微笑んでしまいそうな極上のニヤケ顔になってしまった。

「うみや～さ～。父ちゃんと母ちゃんにも食べさせてやりたいさ～」

ほっぺたが落ちてしまうとは、まさにこのことを言うのだろう。男はそう呟きながらひょいひょいと菓子をパクつき続けた。

そしてその様子の一部始終は、ジンが黙って見てるといふ形となり本人は若干ウザッたらしくも思っていた。

その調子でしばらく菓子を食い続けていると、ようやく視界にジンの姿をとらえたようで、砂糖のついた指を舐めながら興味を寄せたかのように近づき、ジンの隣に腰を落とした。

「初めましてさ、メガネの兄ちゃん！」

男は無垢で無邪気な満面の笑みでジンに挨拶をしてきた。本人はとても友好的にしているつもりなのだろうが、ジンからしてみればこいつの行動はただ馴れ馴れしだけでしかない。挨拶を半分無視しながらジンはもう一口紅茶を含んで見たが、やっぱりまだ熱くて飲めなかった。失礼だが猫舌にこの温度は絶対に火傷をしてしまう熱だろ。

「何さ～、せっかく挨拶してんのにクール気取っちゃってさ～。オレっちは『アゲート・モルガナイト』っていうさ。同じ合格者同士、仲良くするっさ！」

「・・・・その語尾」

「？」

「～さ、ってお前のそのしゃべり・・・・聞いててウザい」

いきなり何を言い出すのかと思えば、このアゲートと名乗る男に対して自分の率直な意見を啖呵を切るように発言してしまった。ものすごく失礼なことなのだが、ジンは今の発言に全く罪を感じてなどいない。

「ムカチン！初対面に向かってウザいとは何さ？それにこのしゃべり方は、オレっちの故郷から伝わっている歴史のある伝統的な言葉遣いの遺伝さ！歴史があるのさ！」

「要するに古臭いだけの田舎者ってことだろ？」

さらに相手を侮辱するようなことを言った途端、アゲートはいきなり立ち上がってジンの胸座を思いっきり掴み上げた。こいつの顔には、さっきまでの笑みはもう欠片もな無い。あるのは恵比寿に代わる毘沙門天のような歪んだ怒りの形相だけだ。

「お前さっきから人のこと馬鹿にしすぎさ・・・・何様のつもりで話してるのさ？それとも軽く痛い目に合わないかわからない気かな？」

「・・・・熱くなっちゃってよう、疲れないのか？」

アゲートは相当にまで怒っているようだった。追い打ちをかけるようにまた一言余計なことを言い放つと、ジンを締め付ける力が強くなったのを感じた。この腕力から察するに、この男はきっと「戦士」の分野の合格者なのだろう。相手が体力だけにかまけたバカなら、片付けるのは簡単である。

二人はどんどん喧嘩腰になりつつあり、いつ殴り合いが起こってもおかしくない状況にまで陥りメンチの切り合いが続いた。

「喧嘩はよくないね～・・・キシシシシシシシシ」

突如、二人の間から不気味な顔が割って入ってきた。薄い白銀色の長い前髪に顔が隠れて、影が強調されたその顔は、通常の数倍から二乗まで不気味さを跳ね上げさせている。その登場におったまげたアゲートは飛び退き、ジンはその逆で恐怖のあまり金縛りのように体が硬直してしまった。ピクリとも動けず、まさに顔面蒼白となる。

「あんぎゃああああああ！！！！！！ば！ばばばばばばばば化け物おおお！！??」

「失敬な・・・小生は君たちと同じオーディションの合格者だよ？」

男は唇をひん剥くようにツリあげ、歯を剥き出しにしながら「キシシ・・・」と気色の悪い笑い方で金縛りのジンへ視線を向けた。前髪の影で顔が完全に見えないが、目と目が完全に合ったのがわかった。ジンはこの男を真正面から直視できないタイプの男のようだ。

しかし完全にジンの主張を無視しながら、男はなぜか急にジンの顔に手を当ててきた。その不健康そうな生っ白い細い指がなぞる様にジンの顔を上下に滑らせる。ジンはその虫がはいずるような感覚に襲われ、身の毛がよだった。

「んん・・・・・・・・実に良い肌をしているねえ君。男のくせに滑らかでスベスベしている。おまけに体格の非常によい。強く、しなやかな筋肉と頑丈そうな骨格だ・・・こんな肉体を目の前にされると・・・」

男は口元をジンの耳元へ徐々に近づけながら肩や胸、腹筋まではいずりまわした。こいつの呼吸がハッキリと聞こえてきたところで・・・一言。

「是非とも解剖したくなるねえ・・・キシシシシシ」

全身の体毛が逆立った。全身の肌がサメ肌よりの荒い鳥肌になった。サブイボが立った。背中が凍りつくように冷たい悪寒がこみ上げた。

ジンは気を失わないうちに男の手から逃れ、テーブルをまたいでアゲートが倒れた反対のソファーに腰を落とした。こんなにまで体が冷たくなったのは生まれて初めてだった。子供のころに親父にボコボコになるまで怒られた時よりひどい気持ちまで気が沈んでいる。この目の前の白髪男に恐怖し、震えが止まらない。

「キシシシシシ...冗談だよ」

とてもじゃないが冗談には聞こえない微笑を浮かべながら男は二人とは反対のソファーに腰を落とした。男は小柄な体つきで、灰色のベストとズボンの上に、ダボダボのサイズの全く合っていない白衣をマントのように身にまとい、袖で隠れた右手には大きなトランクを握っていた。

「申し遅れたね、小生は僧侶のオーディションでトップクラスの成績で合格した『ファントム・C・タンザニヤ』、医者だ。これからは小生のことを気軽に『ドクター』と呼びたまえ、キシシシシシ」（Cはミドルネームでクリス）

ドクター（ファントム）は簡単に自己紹介を終えると、トランクから出した私物の本を片手に、テーブルのクッキーをつまみながら読みふけりだした。これ以上特に話したいようなことも無いらしい。

まだ寒気が止まらないジンに、アゲートがこっそり耳打ちしてきた。

「あいつ...めっちゃ根暗な空気がするさ」

それには仁も同意見で、わずかに首を縦に振った。そのとたん・・・。

二人の顔の間隙をわずかに冷たい風が吹き抜けるのと同時に、何かが刺さるような冷たい音が聞こえた。二人は恐る恐るそれが何なのか確認するために首を回すと、ソファーに突き刺さったその正体は、一本の細いワイヤーで繋がれたメスだった。メスは二人の髪の毛を数本切り落とし、ソファーの背もたれに深々と突き刺さっている。

ワイヤーは、ドクターの左手の袖の暗黒空間の中まで伸びていた。

「言い忘れたが、小生これでも自慢の地獄耳なのさ・・・キッシシシシシシ」

メスはリールのように巻き取られていくワイヤーとともにソファーから抜け落ち、ゆっくりとドクターの袖の奥へ消えて行ってしまった。ドクターはその後、何事も無かったかのように読書を再開している。

「・・・おっかねえさ～」

アゲートは完全に涙目になり、涙をちょちょぎらせながらジンの袖にすがって泣いた。ジンも同様に、体中の寒気がより一層強さを増し、紅茶で温まろうとしたがまだ飲めなかった。

それからさらに時間を空けることなく、また扉が開かれて新たな合格者が入室してきた。今度は女のようなのだ。

深い緑色という奇抜な色のショートヘアと同色の瞳に、ジャージと濃い紫のTシャツ一枚というとても女性らしいとはいえない格好をし、背中には1mちょいくらいの長さの杖を担いでいる。その杖から察するに、彼女は魔術師のオーディション合格者なのと言うまでも無く理解できた。

「よう、御三方！オタクらもあたしと同じオーディション合格した仲間ってわけだな？」

彼女はとてもじゃないが女らしくない雑な態度と非常に男っぽい話口でヘラヘラ笑いながら杖をソファの脇へ置き、アゲートの隣へ座った。座るだけでなく、隣に男二人がいることも気にすることなく仕事疲れのおっさんのように両腕を大の字に開き、体全体でソファの座り心地を満喫している。おまけに足まで組み、男らしい行動の数々だった。

「いや～極楽極楽、やっぱ良い物扱ってる城の腰かけは座り心地も最高だな～」

何やら非常に疲れているのか、彼女は座るなり首を回し、肩を自分でマッサージしながらリラックスモードへ突入している。首が動くたびにコキコキと疲労性の骨の音がアゲートを挟んでジンの耳にも聞こえてきた。男っぽいというより、ここまで来るともう通り過ぎてオヤジっぽく見えてくる。

ジンもドクターも特に興味を示すようなことはなかったが、アゲートだけは逆だった。

「オレっち、戦士のアゲート・モルガナイトさ！あんたは何て呼んだらいいさ？」

「あたしゃ『ジェット・アメジスト』、魔術師だ。しかしこの城の兵士ときたら、全く嫌になるぜ」

今度は急に指を組んでバキバキと鳴らし始め、イラついたような表情と態度で愚痴りだした。なんだかよく知らないが、どうも御立腹のようだ。

「キシシ・・・何かあったのかい？」

珍しくドクターが口を開き、ジェットがとにかく誰かに話したくてしょうがなさそうなことを聞いてやることにした。

「この部屋に連れてこられたときによう、去り際にあたしを連れてきたこの兵士がボディタッチしてきやがってよう、んで気持ち悪いし腹も立ったからそいつをさっき火だるまにしてやったんだよ」

魔術師らしく、そして男らしい仕返しに陰ながらジンは感銘を受けた。その兵士もつくづく災難だっただろうな、たまたま触れてしまったのか故意に触れてきたのかは知らないがたったそれだけの代償が火だるまの刑だとしたら、実に割に合わないだろうに。今頃きっと誰かに消火されて医務室送りにされている頃だろう。

「ただでさえオーディションで疲れてるってのに、余計なことにあたしの魔力使わせるんじゃないかねっての、まったく」

言うだけ言うと、ジェットは背もたれに倒れるようにもたれかかり、背中も首も力が抜けたように伸ばしきって「ぐで〜」っという擬音がピツタリハマるくらいだらしなく力尽きた。その姿をしばらく見つめていると、不意にアゲートがジンの元へ近づき小声で耳打ちしてきた。

「なあなあ、彼女さあ・・・」

「あん？」

ドクターの悪寒からようやく開放されて再びあのイライラ感が募ってきて、自然とアゲートを睨むような目になったが本人は全く気にしていないようだ。一体今度は何だというんだ？ったく・・・。

「彼女さあ・・・・・・・・・・・・・・・・胸ないさ」

何のどこを見ているのだろうかと思えば・・・・・・・・・・と思ったりもしたが、もう怒るのも馬鹿馬鹿しなってきた。仕方なくジンは言葉より行動で示すこととし、アゲートの頭を思いっきり引っぱたいてやった。スパン！と鋭いキレのある爽快な音とともにたかれたアゲートはテーブルに頭をぶつけた。

「そういや、そのメガネと白衣、オタクらはなんてんだ？」

「小生はファントム・C・タンザニヤ。ドクターと呼びたまえ、男女君、キシシシシシ・・・」

ドクターは本から半分だけ顔をのぞかせながら名乗り終わると、またキシシと笑いながら読書に戻った。

「暗えやつ・・・で、そっちのメガネは？」

ジェットはここで、ようやく紅茶が冷めてきて今飲み始めたばかりのジンへ向けて横目で白羽の矢を立てた。

ジェットだけでなく、アゲートとドクターも興味を持ったようにこちらを向いている。

「あ、そう言やそうさ！オレっちまだあんたの名前聞いてないさ！いい加減教えるさあ！」

真横にいるジェットとテーブルから起きあがったアゲートの視線から逃れようとそっぽを向いて逃れようとしたが、そっぽを向いた先にはいつの間にかドクターのあのねちっこく冷たい視線がスタンバっていた。

なんだかもう、逃げ場が無いっぽかった。

ジンはしばらくしてため息を吐くと、ようやく重い腰を上げた。

「・・・ジンだよ。ジン・K・ジェイド。剣士で合格」

不本意だし、とても嫌々だが観念して名乗ると、ジンはその場の空気をごまかすように覚めた紅茶をすすった。

「ジンねえ...まあ、よろしく頼むわな」

「ようやくしゃべってくれたさ。最初っからそうすりゃいいのにさあ」

「キシシシ・・・」

バゴオオオオオオオオオオオン！！！！

目標と達成したかのように空気が和らいだ瞬間、部屋全体に爆発でもしたかのような轟音が響いた。この部屋に入るための扉が四人の目の前を高速で通過し、反対方向の壁に激突して粉々に粉砕された。

何事かと思い、四人はそれぞれ身構えながら扉があった方向を睨んだ。扉があったはずの場所に

はもう扉は存在せず、不自然な煙が立ち込めていた。

ゆっくりと煙が晴れてくると、煙の向こう側から誰かがこちらへ向かった歩いてきた。後ろを半分の髪を1本で結んだ漆黒の髪に、獲物を目の前にした獣か爬虫類のような鋭く力のある三白眼、細身だがガッチリとした体格、そしてどこか異国のものと見える民族風な格闘家が好んで着用するような紺色の闘衣。

男は、歩いているだけでも凄まじいオーラを漲らせている。

「フン・・・大層見栄っ張りなのは外側だけで、中身はずいぶんと安普請だな」

男は今自分が破壊した扉について毒を吐くような評価を降すと、まるで何事も無いかのように開いているドクターの隣の席へドカッと座った。男は、ただこうして座っているだけでも異常な威圧感を周囲に与え続けている。最低でも、ここにいる四人はそう感じた。

「キシシ・・・剣士、戦士、魔術師、僧侶を除くと、君は最後のオーディション合格者だね？」

すぐ隣に座っていたドクターがだれよりも早く、恐怖を感じさせないかのような口ぶりで質問してきた。

「その通りだ。俺の名は『古 虎眼』（クー フーメイ）。見ての通り、舞闘家だ」

虎眼と名乗る男は、やけに偉そうに自己紹介をした。

舞闘家と呼ぶより、破壊活動家化のようにしか見えないのだが・・・しかしジンはそんな感想を口に出さなかった。

どうでもいいかもしれないがこの国で「虎眼」などというニュアンスの名前は聞いたことがない。このラプチナとは違う国の出身なのだろうか？

「フーメイ・・・なるほど、君は生まれた大陸が違うね？」

「そうだな。俺はラプチナ生まれではない、自分の力と技を磨き、強くなるためにこの国へ訪れているにすぎない。」

「そいつぁ大変そうさ」

「まあな・・・ここまでの道のりも長かった。金が無かったから大陸間の移動はもっぱら水泳が主だったし、途中で野党にも襲われたり野生の凶暴な獣どもに何度も寝込みを襲われたりもした。」

「お前よく生きてるな・・・」

「昔からすでに何度か命を失いかけている。しかし俺には強くなるための理由がある、たかが獣如きに負けたりはしない。」

「聞いちゃ悪いがお前本当に人間か？」

「武を極めし者として、心技体を極めし時こそが本当の『最強』の座にふさわしいのだ」

虎眼は、あくまで淡々と冷静な口調で、自らの人間ではできないような激闘の生活感を四人に説いた。

しかし他はあくまでも人間の範疇に収まっている連中だ、この男のあほらしい人生論に、ただひたすらドツ引きする他無く啞然としていた。

そう、たった一人を除いて・・・・・・・・。

アゲートだ。こいつ、虎眼の人生論を説かれた途端、ぼたぼたと涙を床に落としている。男泣きだった。

「皆様、国王がお待ちしております。こちらへどうぞ」

老人はそう言うなり、かなり紳士的な立ち居振る舞いで5人を導いた。

その場所の名は『玉座の間』、すなわち国王と謁見できる唯一の場所のことである。

5人が導かれてやってきた玉座の間の広さは、半端では無かった。ジンの家が丸々3つは入ってしまいそうな程に広い床と高い天井だった。床はもとより、壁や天井、果ては柱に至るまで何やら高そうな石を使った仕様となっており、入口から玉座までには大きなレッドカーペットも敷かれている。

そのカーペットの上に、5人は横一列に並ばされて歩いてきた。全員部屋に入ったとたん、物珍しそうにあたりをキョロキョロと見回りながら歩いているので田舎丸出しである。

壁際にはそれぞれ20人くらいの数の兵士が、まるで置物のように規則正しく並ばされ突っ立っている。とてつもなく重苦しい雰囲気だ。

5人は玉座の手前5mくらいの場所で足を止められると、ここまで連れてきた紳士のじいさんが後ろへ下がって消えた。正面の玉座にはすでにこの国の王が座っており、満面の笑みで5人を迎え入れてくれた。

「ようこそ、選ばれしプロフェッショナル諸君よ。」

国王は喜ばしように拍手をして出迎えると、一度軽く座り直してから話を始めた。

「君たちにはそれぞれ厳しい内容のオーディションを受けてもらい、大変御苦労であった。一体なぜわしがこんなことをしたかと言うと・・・」

「・・・ちょいといいすか～？」

国王様のありがた～いお話が始まろうとした瞬間、話の腰を折るような声を出しながら一人が挙手した。

それはもちろん、ジンだった。

「貴様！国王陛下の大切な話の途中だぞ、身をわきまえんか！！」

一番近くの壁際に立っていた一人の兵士が声を荒らげて注意したが、そんな声を素直に聞き入れるほどジンの教育は良くない。ハッキリ言ってそんな声屁でもなく、十分に無視できる範疇の出来事だった。猫に小判、ジンに注意である。

「オレあいちいさあ、グダグダダラダラ長ったらしいだけの話聞くのなんか大っ嫌いなんだわ。さっさと用件だけちゃちゃっと済ませてくれや」

このあまりにも自己中心的...むしろ通り過ぎて唯我独尊な発言にキレた兵士たち数名が動き出し、ジンの首へ素早く手にしていた槍をあてがった。この間わずか5秒程度、流石に腕はあるような兵士たちの早業だった。

一番側に立っていたアゲートはひっくり返って尻もちを突き、他の3人も驚きを隠せずに数歩その場から離れてしまった。しかし当の本人たる人は微動だにせず、汗一滴かかず、呼吸ひとつ乱したりもしていない。

しばらくの間国王とジンが睨み合いが続くと、国王が周りの兵を元の位置へ下げさせた。

「ずいぶんと肝が据わっているねえジン・K・ジェイド君。いいだろう、余計な話は無しに本台へ入ろうじゃないか。」

国王は手近にいたさっきの紳士のじいさんに命令し、何かを持ってこさせた。

テーブルの上に置かれ5人の前に運ばれてきたのは、宝飾が施された何やら見たことのない丸い盆のような金属の塊だった。その盆を真っ先に覗き込んで手に取ったのは、さっきの騒動から立ち直ったアゲートだ。

「・・・？これなにさ？」

アゲートはそれを指の上に乗せると、まるでボールのようになると回転させながらのんきに訪ねた。そこへドクターが近寄って来て、アゲートへ耳打ちした。

「気をつけて取り扱った方がいいよバンダナ君。その板っ切れ、ロクでもないほどの魔力がダダ漏れているを感じる・・・キシシシシ」

それを聞いて取り乱したアゲートは、バランスを崩してしまい指から盆を落としてしまった。しかし床に落ちて砕け散る寸前、虎眼が盆を足でキャッチし、大事には至らなかった。

「大切に扱ってくれ。それはわしが昔商人から買い求めた品でな、調べてもらった結果何か強大な魔力が封じ込められていることがわかったのだ。」

その説明に、虎眼からその盆を受け取ったジンが眺めながら「ふ～ん」と相槌を打った。しかしその顔には真剣さの欠片さえも見受けられない。

「その盆に6つの窪みがあるじゃろ？そこにはその魔力の封印を解くためのカギが入る仕組みになっている。」

順番に今度はジェットが盆を受け取り、よく見てみると、確か丸い窪みが6つある。それぞれボール程度の大きさの窪みだ。

「な、る、ほ、ど……つまりはそういうことかい」

今までの話の流れと、この盆の穴からドクターは国王が今言いたいことがほとんど理解できた。ドクターだけで無く、アゲート以外の勤の働く3人も大方理解した。

「キシシ……ようするに、小生たちはその板っきれの封印を解くための『鍵』とやらを探してくるのが、小生たちに課せられた仕事……ということで間違いないね？」

「その通りだ。そこに入る鍵の正体はすでに調べが付いている。鍵は強力な魔力を有した、『宝石』だ。宝石はルビー、サファイヤ、トパーズ、エメラルド、オニクス、そしてダイヤモンドだ」

国王が淡々と説明を続けると、さっきのじいさんが別の台車を引きながら現れた。

「その宝石がどこにあるのかは正直皆目見当がつかない。だがこの世界のどこかに存在していることだけは確かなのだ。そこで君たちには全世界を探し回り、その宝石を見つけ出してここへ持ってきてほしいのだ。何年かかっても構わない。探すだけ探し回って、もしも存在しないという結末であったとしても構わない。これは、その餞別じゃ」

新たな台車に積まれていたのは、数冊の本、二つの異なる布袋、そして最新版の世界地図だった。虎眼が本を手にとって内容を確認してみると、どうやら本は全て宝石にまつわる知識本のようなだった。

「きっと何かの役に立つはずなんじゃ。持って行ってくれ」

ジンが片方の布袋のヒモを解くと、ジャラジャラといつか聞いたことのある懐かしい音が聞こえた。金属的な音ではない、これは石の音だ。

袋を開いて確認すると、やはり袋の中身は全て石で埋め尽くされていた。ただどれもこれもそこから辺に転がっている河原の石なんぞではなく、それぞれ赤かったり青かったり、または光沢をもってたり透明だったり、様々な石が転がっている。

「……なんだこの石？」

「キ〜ッシシシシシ……薬石だね、こりゃ」

音も無く背後へ忍び寄りながらジンの肩越しから眺めていたドクターがそうつぶやいた。この時、ジンの背中にまた氷を詰められたような悪寒が走った。

「ヤクセキってなにさ？ドクター」

「キシキシ・・・とてもいい質問をしたね～バンダナ君。薬石とは一般的に使用されている薬草と同じようなものでね、石に含まれている微弱な性能や効果を魔力で増幅させ、解毒やある程度の病気や怪我を治したりできる石のことさ」

ドクターはジンの手から袋を横取りし、生き生きとした表情で眺めながら説明してくれた。

「ドクターよくそんなこと知ってるさね～」

「これでも小生は立派な医者だよ？その程度の知識基本だよバンダナ君...キ～ッキシキシキシキシキシ」

体が固定されたように首だけをグリンと回しながら説明をしたドクターは、台車に置かれた全ての本と薬石の詰まった布袋をさっさとトランクに積み込むと、元いた自分の立ち位置へ何事も無く戻って行った。終始顔の影を強調しながら笑い続けるドクターのその表情に、アゲートは再びドン引きした。

「キシシ・・・これは小生が預かっておこうか」

ドクターの奇襲から少しづつ立ち直ったジンは、次にもう一つの袋のひもを解いてみた。袋を広げると、中には薬石と同様にぎっしりと敷き詰められた金貨が入っていた。生まれてこの方これだけの金を目にしたことなど無く、ジンはヒュ〜っと口笛を吹いた。

「その袋に入った金額が、君たちへの期待の表れだと思ってくれ」

「ふーん・・・期待に添える気はサラサラねえけどな」

ジンは誰にも聞こえないように自分の本心をつぶやきながら紐を結び直し、そのまま袋を虎眼へ向けて放り投げた。虎眼はアゲートとは違い、顔面で受け止めたりすることはなくしっかり手で金貨の詰まった袋を受け取った。

「・・・何のつもりだ？」

「そんな大金オレは腰にぶら下げたくねえ、あんたが管理でもしてくれや」

ジンは眼を細くしながらそう告げると、踵を返して全員へ背中を向け、まっすぐに出口へ向かって歩いて行った。

「おいジン、どこ行くんだよ？」

「今日は色々ありすぎて疲れた。町で宿でもとって寝らあ・・・」

ジンは背中を向けたまま答えると、さっき袋から抜き取った金貨を指で弾きながら歩き続けた。もちろん国王はそんな自分勝手な行動をただ指をくわえて見過ごすようなまねはせず、急いでジンを背中越しに呼び止めようとした。

「まあまあ待ってくれ。外で宿をとらずとも、この城の部屋を自由に使ってくれたまえ。すでに人数分の部屋を用意させてあるし、今日は疲れているだろうから全員それ相応のもてなしを・・・」

「あいにく、ガキの頃から硬いくらいのベッドで寝るのが性に合ってるね。それに・・・お高くとまった野郎の用意した布団にもメシにもオレはありつく気なんて毛頭無い」

国王のもてなしに対し、まるで最終警告を告げるように言い放つと、ジンは壁の向こうへ姿を消した。

翌朝。

自分から進んで城下町の一番安い宿屋の固いベッドで一夜を過ごし、簡素な食事を済ませたジンは今、前日の祭りの余韻に浸っている朝から賑やかな城下町をブラブラしながら城へ向かっていた。門の前では門番に一言あいさつただけで簡単に城の中に招き入れられたところを見ると、すでに自分の顔は全員に割れてしまっているのだろう。

城の中を案内してやろうと人の良さそうな兵士もいたが丁重にお断りし、すでに暗記している玉座の間へまっすぐに向かった。昨日一晩かけて、この仕事はやめる言い訳を今日話すつもりでここにやっているのだ。

数分もかからずに部屋へたどり着き、入室した瞬間ジンの眼の中に飛び込んでいたものを見て、足が止まった。

眠そうな目にしわを寄せながら発した第一声は・・・

「・・・・・・・・・・何それ？」

気の抜けた声でそんなことを言いたくなるのも決して無理はない。玉座の間に集合していたあの連中が、昨日とは全く違う風貌と格好でここに立っていたのだから。

アゲートは黒いベストにズボン、そしてあのベルト巻きのブーツ、長袖の上着と思えるものは腰に巻きつけている。ジェットは黒いフード付きローブに下半身は厚めのズボン。ドクターに至っては全身真っ黒いダボダボのサイズの合っていない白衣（黒衣？）を身に纏っている。

「やあメガネ君、遅かったじゃないか・・・キシシシシ」

「いや～この制服さ～、マジですげえぞ！！」

「ピッタリサイズの上に、ものスッゲー動きやすいさー！！」

三人は城から支給されたと思われる黒を基調とした服に御満悦だった。あのドクターでさえ、心なしか喜んでいふうに見えてしまった。

「全員揃いに揃って・・・なんなんだその服？」

「ぬふふふ～・・・じゃーん！さ」

アゲートは特別にやけた顔をしながら上半身をのけぞらせ、不自然に自分の胸板を強調するように見せつけてきた。仕方なさそうにアゲートの胸を見てやると、ちょうど左胸のところにラプチナ王国の紋章、「十字架に翼」のエンブレムが銀糸で刺しゅうされていた。さらに見れば、その紋章は他の二人にも刺しゅうされているのが解った。

「わしが特注した、君たち専用の制服じゃよ」

国王がニコニコとご満悦そうに微笑みながら、とても朗らか無口調で説明してくれた。

「君たちはこの国で特別に選ばれた、このラプチナを代表する王国直轄のプロフェッショナルじゃ。それを少しでも自覚し、誇りに思ってくれるようにこのような準備をしたこしだい
でね・・・（延々）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ウゼェ」

ジンはこの瞬間、我慢の限界を迎えた。

「ウゼエったらねえんだよさっきから！！マジで勘弁しろって話だっつうの！！」

感情が剥き出しにされた言葉を、ジンは腹の底から吹き出すように吐きだした。眉間に深くしわを作り、目を細くナイフのように鋭くとがらせて一同を睨みつけた。

「国の代表だとか、プロフェッショナルだとか・・・さっきから聞いてて反吐が出るっつうの！オレあなあ、そういうのが一番大っ嫌いなんだよ！！」

「ジン！！いくらなんでもそれは言いすぎさ！」

「黙ってる唐変木！！こんなんじゃあよう、俺が昨日一晩かけて考えてきたこの仕事抜ける適当か言い訳も意味ねえなあオイ？だったらハッキリ言わせてもらわあな・・・オレはなあ、最初ッからこんな仲良しごっこしながら猿山の大將の言うこと聞くためにこんなところに来たんじゃねえ！！旅だ冒険だ宝石だ、そんなもんハナっから興味の欠片だってねえんだよガキ共が！！そういうことはな、やいたい奴だけが集まってやってりゃいいんだよ！！俺が関わりさえしなけりゃなんの文句も言わねえよ、てめえら全員揃ってキャーキャー騒ぎながらツルんで遊んでろってんだ！」

自分が考えたこじ付け的な言い訳を話すつもりでここに来たのだが、予定が変わった。自分の本当の気持ちをはっきりと伝え、こんなところからさっさとおさらばすることに決めた。

言いたいことを言い終えると、ジンは床に唾を吐きつけて踵を返し、そのまま立ち去ろうとした。

しかしその第一歩を踏みしめる一瞬手前、足元にドスドスと音を立ててカーペット貫き床に5本のメスが刺さりジンの行く手を遮った。メスから延びるこのワイヤーは、やはり昨日顔を合わせたあのドクターの袖の奥へとつながっていた。面倒くさそうに振り返ると、ジェットは杖の先から炎を浮かべ、先端をこちらへ向けている。同様にアゲートはどこから持ってきたのか、自分の身の丈ほどもある大きな戦斧を肩に担ぎ、ドクターは反対の手をこちらへ向けている。

「昨日から気にはなっていたが、口のきき方はもう少し勉強した方が身のためだよ？メガネ君・・・」

「お前の言い分からしたらあたしらのやってることはガキ臭いかもしれねえけどなあ・・・」

「それでもさあ、こっちらテメエと違ってマジの気持ちでここに立ってるさ。マジだからこそ、誇り持ってこの服に袖通してるさ・・・」

三人の瞳には明確で純粋な殺意が込められていた。どんな内容であったとしても、本人たちは本当の気持ちを背負ってここへ赴き、オーディションを合格し、今ここにいるのだ。それをこの仕打ち、激怒しない方がどうかしているだろう。

この3人はジンが戦った兵士たちとは格が違うことだろう。たぶん本気でこれから喧嘩をしたとなったら数的にも割に合わない。では戦うのは無理として、あとは逃げるのか？・・・いや、たぶん無理だな。

溜息を吐くと、本来はこんなこと絶対にしないのだが自分だって命は惜しい、両手を上げて降参を示した。いくら自分の主張をしたところで、この若さで死ぬのはさすがに嫌に決まっている。身の保身のための、戦略的降参だ。

「わーったわーった・・・チッ、言いすぎたことは誤ってやるよ。俺の負〜け」

三人から殺気が消えていき、武器を下すのを確認すると、ジンは再び違う意味のため息を吐いた。

すると今度は、近くにいた兵士がやっと自分の出番が来たように近づき、ジンに大きな紙袋を渡した。見てみれば、中

にはこいつら3人とおそろいの服とブーツが入っている。

「ここまで来たからには、ジンにも着てもらうさ〜」

「降参したんだろう？いいね・・・答えは聞かないが・・・キシシシシシシシ」

「・・・へーへー」

ジンは紙袋を肩に担ぐと、そのままとてつもなく重たい足取りで部屋を後にした。

その後ろ姿は、夜勤明けの親父と同じだったと、後のアゲートは語った。

10分後

ジンは確かに帰ってきた。ジンは今、黒いシャツに足元まで届きそうなロングコート、ストレートのズボンにゴツゴツとした金具つきのブーツ、そして左右の腰にはそれぞれ1mくらいで細身の剣が一本ずつベルトに差し込まれてぶら下がっている。

ジンの制服姿を見た3人は、口をそろえて「「「オォー」」」と声が上がった。どうやらそこそこ似合っているようだ。気がかりなのはなぜこのジジイは自分の服や靴のサイズを知っているのかだが・・・深く追求することは無謀と確信し心の中にとどめておいた。

「着心地はどうだね？」

「不覚ながら・・・悪くねえよ」

ジンは腕や足を回したり延ばしたりしながら動きやすさを確認しながらそう答えた。

「それは良かった。それではすべての準備は整った、選ばれた冒険者たちよ、どうか頼んだぞ！」

国王に元気よく返事する3人と、一人不満そうに生返事をした4人は、そのまま部屋を後にし、さっそく城下町を歩いて城の外を目指した。先頭に立っているのは一番気分が向上しているアゲートで、一番後ろにいるのはジンが逃げたりしないように見張っているドクターだ。ジンは普段はあまり吸っていないタバコのくわえ、少しでもストレスを発散するように努力している。

「いや～ワクワクが止まんねえさ！これからいったいどんな旅になるのかな～？」

「面白くなるといいね、キシシシシシ」

「あっ！そう言えば今思い出した！」

町の出入口まで歩いてきたところで、急にジェットが足を止めて全員を呼び止めた。

「どうかしたさ？」

「おう・・・今朝から気になってたんだが、あのもう一人の野郎はどこ行ったんだ？」

「・・・？そういや4人しかいねえな。虎眼って言ったっけか？」

改めてジンは点呼をとってメンバーの確認を試みた。ジン、アゲート、ドクター、ジェット・・・。確かに4人しかいない。昨日は最後に5人目のメンバーの虎眼がいるはずなのだが今日は姿がまったく見えない。

「お前らと一緒にじゃなかったのか？」

「いや、あれからジンが出て行ったあとすぐ俺の出て来るって言って・・・それっきりなんだよ」

「自分に支給された制服をもって、金を小生に全部預けてね」

「あれえ？ジンと同じ宿に泊ったのかとばかり思ってたさ」

確かにこの町の宿はジンの泊ったあの安宿以外近くには無いはずだ。昨日ジンは宿で部屋を取るとすぐに飯を食って少し寝て風呂入った後、宿の中をグルッと一回りしたのだが虎眼の姿は見えなかったと思う。朝だって飯を食ったらすぐに城に出かけたから、最低でもあの宿に虎眼はいないはずなのだが・・・？

「どういうこっちゃ？」

4人はしばらく通行の妨げになるくらい出入り口の手前で固まり、それぞれ頭をひねってあの男がどこに行ったのか色々と考えてみた。

考えてみた挙句4人がたどり着いた先は、満場一致で「野宿」一択でしかなかった。

「仮にそうだとしたらどうするさ？」

「探しようが無いねえ・・・」

もう少し虎眼の人創造が完璧に理解できていたら、相手の思考から行き先をトレースできたのかもしれないとドクターはつぶやいた。

そんな時だった。

「私ならここにいるネ〜！」

不意にアゲートの頭上から甘ったるい女の声が聞こえてきた。4に人は自然と警戒体制となり、その場から離れて声のした方向、門扉のさらに上を睨みつけた。ジンに至っては弱い殺気を放ち、片方の剣を握っていつでも攻撃できるようにしている。

門扉の上に座っていたのは、一人の女だった・・・いや、女と呼ぶには少々幼い面影が残っている。長い髪を一本に自分の髪の毛で縛り上げ、前髪はピンで留めている。猫のような目と銅色の瞳、腰にはスカーフを巻きつけ、そして一番驚かされたのはそいつは昨日虎眼が持って行ったはずの黒い専用制服を着こんでいることだ。

その証拠として、彼女のジェットよりだいぶ突っ張った左胸には共通のエンブレムが刺しゅうされている。

あどけの無いニッコリとした女性らしい無邪気な笑みでこちらを見下ろしているようで、どうもさっきから敵意のようなものは感じ取れない。しかし、まだ気は抜けていない。

「誰さあんた・・・なんでその服着てるのさ？」

一番不信感を抱いているのはやはりアゲートだった。昨日初対面でいきなり義兄弟の儀を交わした間柄なのだ、突然現れたどこの誰なのかもわからない女が兄貴の服を着ているとなれば、冷静ではいられないに決まっている。

女はヒラリと門扉から飛び降り4人の前へ立つと、その口からとんでもないことを言い放った。

「私の名前は古猫眼（クーマオメイ）。昨日顔合わせた古虎眼と、同じ存在ネ」

笑いながらそんなことを言っているが、とても信じられるような嘘では決してなかった。第一、昨日いた虎眼は男だ。それなのになんでこの女が「自分を虎眼と同じ存在だ」、なんて訳の解らないことを言っているのだろうか？こいつの脳ミソおかしいのか？

「・・・・・・・・最強の馬鹿かお前？」

「あのさあ、だいたいオレっちの兄貴は男でもっとイカツイ顔してるさ・・・あんた女じゃんかさ！！」

「その通りヨ？だから自動的にお前は私の弟にもなったという訳ネ！」

「ふーざーけーるーなーさー！！」

「おいおいアンタ、一体どうやってその服かすめ盗ったのか知らないけどよ、一応こっちの身内の私物なんだ。返してもらおうぜ」

「もう、なんて言ったら信じてくれるヨ？」

「キシ・・・・・・・・・・ちょっと待ちな君たち」

すでに喧嘩モードに突入している3人の間に、意外にもドクターが仲裁に割って入ってきた。ドクターは考え事でもするように顎を指でなでながら目の前の女、猫眼を観察しだした。

「何なんだよ急に・・・」

「彼女の言っていること・・・小生としては決して信じられないわけではない気がしていた。」

「どういうことさ？」

「よく考えてみな、あの格闘家の虎君...おそらく本人の実力はチートに匹敵する力を有しているはずだ。それなのに、たった一人の女に不覚を取って自分の服を盗まれるような馬鹿に見えるかい？」

まあ・・・言われてみりゃ確かその通りだ。

ドクターは片手に握ったトランクを足元に置くと、猫眼の周りをまるで衛星のようにクルクル回りながら観察・・・というよりドクターに言わせれば「診察」をしながら話を続けた。

「昔から実に少ない例の症状がある。メガネ君くらいなら聞いたこと無いかい？『二重人格』ってやつを」

二重人格・・・。確かにジンは聞いたことくらいはあった。確かひとつの肉体に二つの人格、精神が住み着いていて、何かしらのきっかけで片方の隠されていたもう一つの人格が表に出てしまい、肉体を支配してしまうとか何とか・・・。

しかし、そんなことは空想の世界、本の世界でしか読んだことは無く、そんなものが現実に存在しているとは考えたことも無い。

「これはきっとそれに近いもののような気がしてきてならないのだよ、小生は・・・。例えば、君には一つの体しかないが心は二つ所持しており、なんかの理由で男の心と女の心が入れ替わってしまう・・・とかかな？」

「さすがはドクター、話が解ってくれて嬉しいネー！」

自分の言いたかったことを代弁してくれたドクターに対し、猫眼は感激の拍手とともにいきなりドクターに飛びついて両腕でハグハグしてきた。

にわか信じがたい話だが、仮にこの話が本当だとすると・・・この女の発言だけから発想を跳躍させて二重人格説まで行き着いたドクターに、ジンとジェットはただ茫然とした。こんな時だけだが、流石は医者なのだなと感動した。

だが、感激なんかできないのがただ一人・・・

「じ・・・じじじじゃあ・・・この、今ドクターにハグハグしているのが・・・正真正銘の・・・？」

「キシシシ・・・本物の古虎眼、彼本人なんだろうね」

「ガボオオオオオオオオオオン！！！」

衝撃的すぎる事実を告げられた途端、アゲートの目の前が真っ暗になった。握っていた斧を手放し、両手で頭を抱え、ひざから崩れるようにその場に突っ伏し、魂が絶命した（嘘）。ジェットは腫れものでも見る様な眼で猫眼を観察した。上から足元までマジマジと観察し、じっくりと全身を確認する。

「これからは同じ女の子ヨ、よろしく頼むネ！」

猫眼自体は非常に友好的で、同じ女として友情を築くために握手を要求してきた。しかしジェットは手を出すことができなかった。さっきからある一点のみを凝視している。腹部の上、喉の下、つまりは・・・女性の象徴だ。

自分のと比べて・・・圧倒的だった。

触らせてもらったら・・・本物だった。

女として自分のスタイルはあまり気はしていなかったが、相手が男でもあると知った以上、このショックはあまりにもデカすぎた。全身が闇で包まれ、棒倒しの棒のようにうつ伏せに倒れて即死した。（嘘だって）

「キシシシ。謎も解けたことだし、さっさと出発しよう。そこの二人は任せたよ、キシシシシ...」

絶望の底に落ち切っている二人を放り捨て、ドクターは笑いながら歩きだしてしまった。ジンの足元に残されたのは、廃人二人と性別がイカレたバグ人間一人・・・しかもこの生きたバグ、さっきから妙にドクターの背中ばかりを見つめている。・・・考えたくはないことなのだが、妙に赤く染まった頬を見て、物凄く嫌の予感がしてきた。

「・・・あいつはいつもあんな感じなんだかね？」

「そうネエ・・・でもああいうクールなところ、好みかもしれないヨ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハイ？」

今一瞬自分の耳を疑った。あのドクターの・・・・クールなところが・・・・好み・・・・？
マジで？

「・・・・・・・・お前・・・・本気で言ってんの？」

「好きになる男を選ぶ権利は全ての女にあるネ！ドクター、待ッテー！」

猫眼は遠ざかっていくドクターの背中を追いかけるように、走って行ってしまった。とうとう残されたのは足元の廃人だけだ。ジンは急いで二人の廃人を肩と腰に担いで追いかけた。
落ち着いて考えよう・・・・・・・・お前、男でもあるんだぞ・・・・？そうだよな？

余談

この日を境に、ジンは安穩とした生活を送っていたころとは比べ物にならないおびただしい量のストレスをタバコで発散させることを覚え、ヘビースモーカーの仲間入りを成し遂げたのであった。

これでようやく旅は始まった。始まるだけは始まったが・・・・・・・・・・しょっぱなからこんな調子でこれから先一体どうなってしまうのだろうか？

しかし、そんなことは誰にだって解るはずがない。

「・・・・・・・・最っ強に勘弁してくれって話だよ・・・・ったく」

続

後書き

何とか一話書き終えた

これは今までの短編じゃなくて不定期更新の連載に挑戦しようと思う

がんばってみる

たくさん読んでくれることを願います

でも時々短編も書きたいです

誤字がかなり多いかもしれないけどそこはぬるい目で見逃してください

おまけ

名前 ジン・K (カイト) ・ジェイド

年齢／性別 22 / ♂

誕生日 3月15日 (魚座)

誕生石 ブラッドストーン (勇気、救済)

レベル 58

性格 面倒くさがり 唯我独尊 自由奔放

職業 双剣士

装備品 バスターソード×2 黒いトレンチコート

好物 ピーナッツ 雨 モク

嫌物 仕事 熱い食べ物

眼／髪 赤紫、ツリ気味の切れ目／黒、セミロング

身体的特徴 眼鏡着用 (下ハーフフレーム) 隠れ万能体質

イメージカラー 赤

イメージ楽器 ギター

備考 良く言えばクールな男、悪く言えば冷血漢のプー太郎

ヘビースモーカー

意外と一途

希望CV 中村悠一 神谷浩史 新垣樽助

第2話 多難

「白」は嫌いだ。無垢、純真、誠実、正義、無実・・・どいつもこいつも良い意味でこの色を捉えることができる。しかしこの「白」を「絵具」で例えたらどうだ？「白」はほんのちょっとでも別の色が混ざっただけで全く違う色になってしまう。

しだいに混ざる色が増え続けると、「白」は本来の自分の色を見失う。「白」は「白」で無くなる。

「黒」は逆だ。「黒」はどんなに色が混ざっても別の色になることができない。「黒」は永久に「黒」のままなのだ。確固たる存在、孤高の決意、絶対の自信、見失う事のない自分、決して何者にも染まらない・・・。

ジン、アゲート、ジェット、ドクター、虎眼、猫眼。彼ら旅人の制服は全て黒で統一されているのは、そんな意味があるからだ。

城を出発して1日目、時刻はすでに夜を回っている。空はすっかり光を失い、双子の赤月と青月が顔を覗かせている。一行は何も無い平野に腰を下ろし、たき火を熾して食事を摂っていた。今晚のメニューは、街であらかじめ確保しておいた黒パンのハンドと焚火で温めたドクター特製のハーブティーだ。

「モソモソモソモソ・・・あ～、パンなんか腹に溜まんないさ～」

パンをかじりながら愚痴っているのは、もちろんアゲートだ。元々戦士型肉食系なアゲートにとっては、パンの様なスカスカした食事は口に合わないのだろう。もっと腹に溜まりやすい肉や米が彼の主食なのだが、生憎にもここに米も肉も無い。こんな食事では力が入りにくかった。

「文句があるなら食うな、オレによこせ・・・」

そう呟くのはジンだ。不満があるのはみんな一緒だ、だからせめて口には出さないのが大人としてのマナーなのだが、そんなことも知らないアゲートの無頓着さにとてもイライラしている。無表情でパンをかじりながら片手を差し出してアゲートの分のパンを要求すると、アゲートは渋々仕方なさそうにパンをかじり続けた。

「仕方ねえだろ？金だって無限にあるわけじゃねえ、節約しながら生活するのはこの先旅の基本だぜ。ゼータク言っくんじゃねえよ」

そう言うのは口の中いっぱいパンを詰め込んでお茶で流し込もうとしているジェットだ。さらに隣でさっきからチビチビとパンをむしりながら食べているドクターも参加してきた。

「キシシシ...その通りだねえ。愚痴るような奴に食わせる飯は無だってことさね。食いたくなけりゃその辺で空腹で野垂れ死にすればいいのさ、キシシシシシ・・・もちろん冗談さ」

「悪いけど、冗談に聞こえなかったさ」

何にせよ、この先長い旅になるのは明白なのだ。贅沢なんか言っている身分なんかでは決してない。ドクターの不気味な一言に顔色を悪くしながらも食事を完食してお茶を一気に胃の中へ流し込みながらちょっとだけ反省した。

その後、ドクターの隣で食べている猫眼を見た。アゲートとしては未だに信じ切れていない真実だ、あの虎眼とこの猫眼が同一人物で、二人は肉体と記憶を共有し合う二重人格人間だなんて……。現在は女の姿なのだがチラッと顔を確認してみると、猫眼は何やら虚ろな目をしながらパンを加えながらポーっとしていた。この顔は良く知っている、どうもお眠の様子だった。

「ふう・・・おい姉御、無理しないで寝たいならさっさと寝てしまおうさ」

アゲートの発言でようやくドクターも気づき、アゲートは仕方なさそうに自分の腰に巻いた裾の短いジャンパーを猫眼の肩へかけてやった。

「うにゅ～・・・悪いネ。それじゃ遠慮なく寝かせてもらうヨ・・・ファァ」

かじりかけたパンをドクターに預け、猫眼はゆっくりと倒れるように横になって目を閉じた。

その直後、猫眼の肉体に変化が見られた。身体全体の骨格が太くなり、腕や脚の筋肉が盛り上がる。柔らかな胸の代わりに分厚く強靭な胸板が現れ、顔もこの猫の様な顔が徐々に角ばった男の顔に変化した。数秒ほどで肉体の変化は止まり、猫眼は男の虎眼へ姿を完全に変えてしまった。

それを静かに見守っていた4人は、この肉体の変化に驚きをおくせず、目玉を丸くした。

「本当に・・・変わりやがった・・・マジで？」

「ウソみてえだぜ・・・本当に男になっちゃいやがった」

「キシシシ... 生で目撃するところまでハッキリとした変化だったとは、驚愕だよ」

3人がそれぞれ感想を述べていく中、アゲートはでいるだけこれ以上信じたく無かったことが現実になったことを認め、ガックシと肩を落としていた。

しかし意外と数十秒で立ち直ることができ、今度は前向きに捉えることとした。アゲートは寝ている虎眼の元へ近づくと、いきなり虎眼の髪を握った。そしておしゃれに編みこまれた髪を解き、ピンも外して髪をゴムで簡単に一本に束ね上げるとどうだろうか……。

「・・・よし！これで兄貴になったさ！」

一体何に満足したのかは知らないが、3人は喜んでいるアゲートを残してそれぞれ横になり就寝の態勢に入ってしまった。

「あれ？もうみんな寝るのさ？」

「おう・・・今晚の見張りは頼むぞ」

「キシシ・・・貴重品の管理、しっかりと頼んだよバンダナ君」

「この辺野党も少なくないからよう、朝起きたら素っ裸なんてオチ、あたしゃ嫌だからな」

「・・・オレっち一人で今晚徹夜さ！？」

翌朝

一番に目が覚めたのはジンだった。時計を確認すると時刻は6時を過ぎたばかりだ。焚火はすでに燃えカスとなっており、辺りには薄っすら霧が立ち込めて景色がぼんやりとしている。しばらく腰を起こしてぼーとし、意識がはっきりしてきた頃に他のメンバーを起こした。見張り役のアゲートも座ったまま器用に寝ていたので、特別きついゲンコツを数発食らわせてたたき起こしてやった。見張りが寝ていたのにも拘らず荷物が無事だったのが幸いだったが、これからは見張りの順番も決めようという話になった。

昨夜の残りのパンを朝食にかじり、さっさと脳みそを覚醒させた一行は荷物をまとめて再び歩き始めた。この時にはすでにもう霧は晴れて、青い空と照りつける太陽が顔を出していた。

今日の戦闘を歩いているのは、自称この辺りの地理をを最も詳しく知っていると言った虎眼だった。

「ところでさ兄貴、オレっち達今どこに向かって歩いてるさ？」

「この辺りで近い村、クォーツだ」

虎眼は振り向くことも無く無表情のまま答えた。ドクターはトランクから地図を取り出し広げて現在地とクォーツの位置を確認すると、ここから北東に進んだ場所にある小さな村のようだ。クォーツの村ならジンも知っていた。ガキの頃親父の誕生日プレゼントを買うためにそこへ行ったことがある気がする。

「俺たちに今最も必要なのはとにかく情報だ。特に宝石の情報、できるなら専門職のいる村で探した方がより良い情報を手にできる可能性がある」

そう言うと虎眼は少しずつ歩調を速め、4人とは差をつけるように先へ進んで行ってしまった。アゲートはそんな虎眼に追いつこうと少し小走り目に急いでくっついて行った。

「ふーん・・・クールな奴だねえ」

「そうだな、少なくとも、昨日までいた猫眼よりはかなりマシだな」

ジンはこの時、猫眼がドクターの背中を見つめながらつぶやいた一言を思い出していた。どうにも一目惚れの様なのだろうか・・・改めてドクターを見てみるがハッキリ言って好意を寄せるにはかなりの苦行を重ねる必要があるそうではない。その余りの気色悪さに震えるジンの身体を、すでにドクターは見逃さずにいた。

「・・・風邪かい、メガネ君？」

「・・・っ！！！」

いきなり背後から目を輝かせながら迫ってきたドクターに、ジンはまた全身に寒気がした。

「これは一大事だ、旅人が風邪をひくなんて致命的だよ？ここに小生オリジナルブレンドした新作薬があるのだが、是非これを君が服用してどんな効果が表れるか実け・・・いや、さっさと飲んで風邪を治すといい・・・キシキシキシキシ」

首筋から後頭部にかけてドクターの生温か〜い息が吹きかかり最っ強に気分が悪くなった。さらにジンの目の前に差し出すように薄い紙袋に密封された薬が現れた。

・・・これを飲めと？さっき明らかに「実験」って言おうとしたよな？人体実験の材料にする気かこいつは？ジンだけに。

怪しきは1000%、何が何でもこんな薬飲むわけにはいかない。

「いや、ガキの頃から風邪は薬に頼らず自分の免疫力で治すように親父に鍛えられているから平気だ・・・」

ドクターはこの回答に対して明らかに聞こえるような舌打ちをし、わずかに「残念...」と一言つぶやいてその場から離れて行った。

こんな人間、好意を持つ奴の気が知れない・・・ハッキリ言ってもいいのならこいつは狂ってるんだぞ・・・？そんな人の今の気持ちは、誰も理解できないでいる。（だって口に出してないもん）

1時間以上は歩いたろうか・・・一行は虎眼の経験と勘と地図を頼りに歩き続けてここ、「クォーツ」の村へたどり着くことができた。

この村はジンの暮らしていたクリスタルよりも建物の数は少ないが、代わりに畑や放牧が広がっているととてもどかな村だった。村の中心には大きな河が流れ、その奥にもどうやら家と思しき建物も見える。

「いや～、結構のんびりとした村さ～」

「キシシ・・・清々しい気候に恵まれている。小生の気分も清々しくなりそうだよ」

お前の気分が清々しくなるとはとても思えねえ・・・。そんな言葉を心の奥底に封印しながら一行は柵を越えて村の中に入った。

すぐそばで畑仕事をしていた第一村人を見つけると、早速虎眼が駆けつけて声をかけた。そのまましばらく離れたところで会話をして一分ほどで帰ってきた。

「いい情報があった。この村には都合良く宝石店があるそうだ」

「キシシ・・・なるほど宝石店か。邪の道は蛇、宝石を探すなら専門店ってか」

「有力な情報があるかどうかは別だが、行こうぜ」

一行は早速教えられた宝石店へ向かった。その店はこの村の奥の橋を渡って少し奥へ進んだ先にあるらしい。何かしら自分達の探している宝石に関して有力な情報があるといいが・・・まあしかし搜索は始まったばかりなのだ。気長に探したって別にかまわないだろう。

たどり着いた宝石店は川沿いに建てられており、側面には水車も回っていた。扉をあけるとランコロンと来客を知らせる小さな鐘が鳴った。

店内は思っていたより広く、入口を除いた壁際と店の中心には大きなショーケースが設置され、中には大小様々色折々の宝石が自分の存在を主張するかのように煌めいていた。

しかし肝心の店員はと言うと、店の奥のカウンター席で退屈そうにヨダレを垂らしながら眠っていた。この店が一体どのくらい暇なのかを物語っている。

仕方なしにジェットとアゲートは店員が起きるまでの間、せっかくなのでとケースに保管されているこの宝石たちを鑑賞することとした。

じれったい性格のジンは速攻で店員の身体を揺すったり、カウンターを蹴ったりして叩き起こそうとした。

しばらくすると店員はゆっくりと眼を覚まし、目の前にいるのが久しぶりの客だと解るや否や、目をおっ広げてヨダレを急いで吹き拭った。

「い、いらっしゃいませ！この度は当店をご利用いただきましてありがとうございます！」

店員はできるだけ自然を装いながら早口で恒例の挨拶を言いながら、自分の袖でカウンターにできたヨダレの泉を急いで吹いた。

「えっと、今回は何をお求めで？」

「欲しいのは品物じゃなくて情報だ」

「ハア・・・？」

起きぬけでいきなり買い物じゃなくて情報が欲しいと言われ、軽く混乱する店員を尻目に自分達の目的を大雑把に説明し出した。

大方の話を呑み込んだ店員はしばらく腕を組んで「うう～ん」と難しそうに唸り、首をかしげた。

「なんでもいいんだ、何か知らねえか？」

しばらく考え込むように目を閉じ続けていると、不意にまぶたが開いて悪だくみを思いついた悪ガキの様な笑みを浮かべた。

「なんでもいいってんなら一つ情報はあるかな？」

あまりにもあっけない情報提供だった。まさか一発目から何かヒットするとはさすがに思いもつかなかったので全員目を丸くしながら店員のその情報に食いついた。

しかし相手は相手も商売人だった。その情報について詳しく聞こうとしたら、店員は情報と同等の交換条件を吹っかけてきたのだ。

その交換条件の内容はこうだ。

「この村から少し東へ行った先に湖があるんだ。実はここ最近その湖に出かけた連中が全員出かけたっきり帰ってこないって話なんだよ、もう7人も行方不明さ。そんであんたらにその湖をちょっと調査してきて欲しいんだよ。行方不明の原因を見つけるか、あわよくば犯人をしょっ引いて行方不明者を助けてきて欲しい。それができれば、あんたらの欲しがる情報を提供してやるぜ？」

一行はしばらく店外ではないあった後、何でもいいから情報が欲しいと言ったのはこちらなので仕方なくその依頼を引き受けることとなった。

「だああ！！あの商人、マジでムカつくさあああ！！」

アゲートが自らのいら立ちに任せて戦斧をブンブン振り回している。都合のいい情報が楽して手に入るとは思っていなかったが、あの店員の口車に乗せられたような気がして腹が立っているのだ。ジンも今のアゲートと同じ心境で、タバコの消費がさっきより激しくなっている。

「キシシシシ・・・仕方のないことさ、相手も商売人なんだ。とっとと依頼を終わらせて・・・その後で情報機器出した後に逆さ吊りにして店先で吊るし上げてやりたい気持ちはあるけどね・・・キシシシシシ」

一番冷静そうな顔をしていたドクターも、さすがにムカッ腹は立っているようだ。ドクターはさっきから歩きながら小さい研石で自分のメスを磨きながら不気味に笑っている。ウシを出はそんな嫌なオーラを漂わせる3人を見つめるジェット、ハナっから興味も無いかのように無視しながら歩いている虎眼がいる。

10分も歩いたところで、一行はその話に関わられた湖に到着した。20mくらいの大きな楕円形の湖で、一端が川となってクォーツへ向かって流れている。この湖は村の水源なのだろうか？草類は少なく、土が露出しており地面が水分を吸ってもろくなっている。

「ここが例の湖か・・・。けどこれと言って別に変わったところもねえなあ」

ジンは水面を覗きこんでそう言った。水深は大体10mオーバーってところ、湖の底が良く見えるくらい綺麗に透き通っている。

「なんでこんなキレイところで人が消えたりなんかするさ？」

アゲートがジンの隣にしゃがみこみ、手を水面でチャプチャプと戯れてみるが、特になんて事の無いただの水だった。水面がわずかに波打っただけだ。

「おかしなもんだな」

「まったくだ・・・もっと周りを調べてみるぞ！」

虎眼の指示で自然と全員が動き、そろそろと水面を離れて奥の雑木林の方へ向かった。ただたった一人、ドクターを除いてだが。

ドクターは途中で足を止めると、振り返って水面の側まで寄った。

「キシシ・・・何か分かるかもしれないねえ」

ドクターはトランクを開き空になっている薬瓶を一本取り出すと、瓶の中に湖の水を少し採取した。瓶の中が水で満たされてきた頃、ドクターは何か不審なことにここで気がついた。水の中で、さっきから何かだ発泡しているようだ。

瓶の泡ではない、第一その泡は岸より2 mも離れている。小さな気泡がプクプクと水中から発生し、水面ではじけて消えている。何とつかまるで・・・そう、あれの様な。

不思議な現象に気を取られていると、今度は突然から大きな水柱が立ち上がり、しかもその水がいきなりドクターの顔面を驚掴みにすると強力な力で水の中へ引きずり込まれてしまった。

この間、大きな音はほとんど出ていない、まさに摩訶不思議と言わんばかりの現象だった。

「……ん？」

雑木林の中で腐りかけていた気を眺めていた時、ジンは何となく湖の方を振り向いた。

「どうかしたさ？」

ジンのすぐ後ろにいたアゲートが、不思議そうな顔でジンの顔を覗いている。特におかしな点は見られない。

「……なんでもねえ」

自分の気のせいなのだとは決定づけ、新しいタバコに火をつけた。湖に異常が見られないのならこちらの雑木林に問題があるのかと思って全員であらかた調べてみたが、どうにもこれといった手がかりが見つからないままている。

「こっちにも異常が無いと来たか……あゝあゝ 解らん！」

虎眼は明らかにイライラし始め、頭をガリガリと引っ搔いている。犯人どころか、人が消える原因すら分からないままなのだ、誰だってイライラするに決まっている。

「しかし、何なんだろうなあ、人が消える理由ってのはよう」

「本当にその通りさ、せめて消える瞬間でも目の当たりにすれば見当だって立て……」

……立て、なんだ？

アゲートのセリフが不自然な所で途切れた。なんとなくジンが振りむいて見れば、自分の真後ろにさっきまで立っていたはずのアゲートが、影も形も残さないままその場から消えていた。冗談なんかではない、確かに……消えている。ジンの口からポロリと加えていたタバコがこぼれ落ちた。

「……お前ら、早速消えたぞ」

間の抜けたジンの声に促されて二人も振り返った。確かに、さっきまでここにいたはずのアゲートの姿が無かった。

しかも今気付いたが、なぜかドクターの姿まで無いではないか。

「どうなってんだこれ？」

「知らねえよ。ドクターまでいないなんて・・・」

ジンは唇をわずかに震わせながら新しいタバコを咥え直すと、額から何か嫌な冷や汗が流れ落ちてきた。居ても立ってもいられなくなり、タバコに火を付けずに吐き捨ててさっきの湖へ戻るために走り出した。湖でジンが見つけた物は、ドクターのいつも持ち歩いていたトランクが転がされるように放置されていた。

「こういうことって、最っ強に勘弁してほしいって顔してるよなあ、オレ？」

ジンはトランクを調べていると、トランクは中身まで水で濡れており、足元周辺まで水が散らばったような痕跡が見られた。まさか考えにくいだが、ここでドクターが水を吸って脆くなった地面に足を取られて滑り、そのまま湖へドボン！！・・・。

んな訳ない。あいつがこんなバカなことをするような奴では決してない。と言う事は、水の中へ引きずり込まれたとみてほぼ間違いのない筈だ。あのドクターを瞬く間に、こちらが気付かない内に引きずり込むような奴とは誰なのだろうか？動きが素早いのか？それとも暗殺者の様に気配を完全に殺して近づくことができるような奴なのだろうか？いくら考えたところで、これだけの現場証拠だけでは見当が付きにくい。

やがて後ろからジェットと虎眼が追いついてきた。

「どうしたんだ・・・？おいジン、それってまさか・・・ドクターの？」

「ああ。かなりヤバそうだな・・・水の中にいる」

「オイオイオイ、マジなのかよ？」

3人はこのドクターが落とされたとみられる場所から水面を覗きこんだ。・・・しかしいくら見渡しても水はいくら見たって水、なにも変哲は無い。それだけは相変わらずだった。

「ちい・・・仕方がない」

「どうしたんだ両生類？」

「虎眼と呼べアホ。直接潜って調べてくる」

そう言って虎眼は立ちあがると、上着を脱ぎ捨てて肌着一枚の姿となった。一瞬無駄の行為だと言いたくもなったが、また何かゴチャゴチャ言われそうな予感がしたので言わないことにした。その直後

「オイ待てお前ら！！」

飛び込もうとした虎眼を呼びとめたのは、ドクターのトランクの中身を物色していたジェットだった。トランクの中を初めて見るからこの機会にいろいろ覗いてしまえと思ってトランクの中身を物色している時、トランク全体から・・・違う、トランクに飛び散っているこの水にジェットは違和感を覚えていた。

「この水・・・なんか変だ」

「何がだ？」

「この水、湖の水と違ってほんの少し魔力が通ってるぞ」

ジンでは解らなかつた重大な事実に気がつかされた。トランクを濡らしているこの水に魔力が混じっている・・・と言う事はこの水は誰かが操った水で、水をどこかから操作してドクターを水の中へ引きずり込んだという訳か。

これで犯人はかなり絞られた。犯人は「魔術師」で決まった。

「なるほど・・・。それなら納得いくような気がするが、犯人はどこから水を操っていたかが一番の問題だな」

「そう言う事だ。だけど水を正確に操って人一人を引きずり込むんなら目の届く範囲でしかこの魔術は操作できないはずだ。どこかの木にでも登っている可能性もあるが、虎眼はどう思・・・あれ？」

ジェットが振り帰ったとたん、顔面が青ざめた。ジンの後ろでシャツ一枚になっていたはずの虎眼が・・・いなくなっている。ついさっきまでいたはずの足場には、水でずぶ濡れになっていた。この距離からジンも気付かず、あの虎眼まで餌食にされてしまうとは・・・犯人はどうにも相当な実力者なのかもしれない。

「・・・話に夢中になって気がつかなかったぜ・・・クソっ！」

「フゥ・・・最っ強に嫌な展開になってきやがったな」

気持ちをタバコで無理やり沈ませながら虎眼が立っていた個所を調べた。こちらはドクターよりも水浸しで、小さな水たまりまでできていた。

改めて水面を覗いてみると、水面は波打った波紋が湖全体にゆっくりと広がっていた。もちろんここに虎眼の姿は一切見受けられなかった。仮に犯人は本当に水を操って人間を水の中へ引きずり込んでいとしても、この見通しの良い空間の何処で水を捜査しているのだろうか？必ずこの湖が、今なら自分の姿がハッキリと見えていなければならないのならこの雑木林の中のどこかしかない。

なのにこの雑木林はさっき隅から隅まで調べつくしている。つまりこの一番見えやすい場所には犯人はいないと言う事になる。

ここが問題だ……。犯人はどこで、そしてどうやって水を操っているの尾だろうか、サッパリ解らなかった。

しばらくの間この水たまりを見下ろしながら頭の中で考えていると、ここで偶然手掛かりになりそうな物を見つけた。

それは「手形」だった。虎眼の手ではない、虎眼よりの一回り小さい手形だった。水たまりの底の土がクッキリと凹んで手形ができている。

ここでジンの頭に一つの仮説が思い浮かんだ。これを確実に確認するためには、水から離れて身体をブルブルと震わせているジェットの協力が必要不可欠だ。

ジンは急いで思いついた作戦をジェットに耳打ちした。

「……………ええ?!まさか……………いやでも確かに……………。まあ、もちろんできるが」
「よし、早速実行だ!」

湖の岸には、ジンだけが立っていた。何も口に出すようなことはせず、ただ睨むような目で湖全体を見回している。すると今度はロングコートとブーツをその場で乱暴にぎ捨てる、2本の鞘から抜いた剣だけを持って水の中に飛び込んだ。

水の中はとても冷たく、今日の外気温は普段よりの暑かったので遊泳するだけなら最高の気持ちだ。と、そんな事を言っている場合ではない。

周りをキョロキョロと慎重に見回した。水中では地上での戦いと違ってどんな方向から攻撃が飛んでくるかわかったものではない。いつも以上に意識を集中しないと今度は自分が奴の餌食にされてしまいかねない。しかし周辺には姿を隠せるほどに大きな岩も水草も魚もなく、とても透き通っているから全方向の壁がハッキリと見える。

しばらくの間息を我慢しながら周囲を確認していると、正面から何か見えてきた。

見えてきたと言ってもそれは物体ではなく、あえて表現するなら水のおかしな流れだ。水の一部がまるでぼやけるように景色が揺らいでいるのがしっかりと見て解った。どうやらビンゴのようだ。水の揺らぎは、確実にジンへ向かって近づいてきている。ジンは自分の直感でその揺らぎとの間合いをできるだけ正確に確かめながらわざとその揺らぎを接近させている。

揺らぎがジンの目の前3 m以内まで侵入した瞬間、ここでジンが動いた。自分の身体を抱くように両腕をクロスさせると、そのまま物凄い勢いとスピードで水中をなぎ払った。するとどうだろうか、水はジンの身体を中心に渦を巻き、湖に大きな渦潮が発生した。これは先日ジンがオーディションの時に兵士を一撃で仕留めた思いつきの技、「前奏曲（プレリュード）」という攻撃だ。

水は渦巻くスピードが増すにつれて勢いを増し続け、ついには水の外にまで追い出され湖の上に巨大な水柱となって雨のように地面に降り注いだ。

そこへ、ドシャッ！と水とは違う固形の物質が地面にたたきつけられるような重たい音が聞こえ、泥となった地面に人間が転んだような跡が残された。その様子を少し離れた上空から見ていたジェットは見逃すこと無く、サーフボードの様に乗っている自分の杖を傾けてその人型の所へ急降下した。

謎の人型の元へ下りると、おもむろに片腕を伸ばしてその何もない筈の空中にあった物体を確かに掴んだ。ジェットのつかんだ手のひらから火の様な赤い光が漏れ出し、掴まれている目の前の空間が赤く染まっていく。

すると一体どういう事なのか。何も見えなかった空間から、ジェットに首をガッシリと鷲掴みにされて苦しそうにしている出っ歯の海パン男が目の前に現れたではないか。

「・・・やっぱり大当たりってわけかよ」

ジェットはかなり悪どい顔でニヤリと笑うと、一発この男の腹に拳を叩きこんでからドクターのトランクから失敬したロープで縛りあげた。その後、ジンが水から上がってきて体に纏わりついた水を払いながらノコノコ歩いてきた。

「ああしんどかった・・・どうだったオナベ？」

「オナベじゃねえからなアタシは・・・一応大正解、コイツが事の犯人だ」

ジェット海パン男を踏みにじりながら指差した。男はヒィヒィ泣きながら完全にビビっている様子だった。犯人の容姿は年齢20代後半から半ば、ガリガリの骨男だ。

「お前には随分と驚かされたぜ・・・まさかこんな所に「マティーニ」の魔術が使える奴がいるとは思わなかったんだからなあ？見つけれねえわけだよなったく」

今ジェットの口にした「マティーニ」と言う魔術は、水の属性を持つ魔術の中で自分の姿を水に溶けたかのように消してしまうことのできる中級魔術、つまり水の中に限り透明人間になれる魔術のことなのだ。この男はマティーニの魔術を使い水の中に溶け込み、この湖に近づいた人間を襲い続けていたってわけだ。

そのことにジンが気付いたのは、虎眼が襲われた時に残された手形を見たときだ。もしもどこか見えない所で水を操って襲いかかっているのならあんな手形ができるはずがない。そこから犯人は自分から手を下して人々を襲っていることを確かめるためにこの作戦を計画した。

「さ～てと・・・種明かしも済んだところで、早速洗いざらいゲロしてもらおうじゃねえか、ああん？」

ジンは水浸しになった剣を男の額にあてがい、ニヤリと笑いながら尋問は始まった。・・・いや、これは尋問ではなく、もはや拷問だ。

「ヒイイイイイ！！勘弁してくれ！！全部イタズラだったんだよ！！村の連中、皆揃って昔から俺のことバカみたいな物言いするもんだから頭に来て、そんでこの計画思いついて、俺はバカなんかじゃねえってこと見せつけてやりたかっただけなんだよおお！！信じてくれよおお！！」

あまりにも呆気なく男は小鳥のようにペラペラと全部吐き出した。しかもあんまりにもくだらな過ぎる犯行理由だった。

「フザケた事ぬかしてんじゃねえぞこのクソ野郎があああああああ！！！！」

その後二人にリンチされた男は、縄からクサリで巻きつけられて今まで攫った連中の居る場所へ案内させた。場所は水の中に潜った先にある天然の洞穴の様な場所だった。洞窟の中を少し泳いで水面から頭を出すと、そこには小さなホールの様な空間とシャボン玉の様に輝いているいくつもの球体が転がっていた。よく見てみるとこの中には今まで浚われた人が閉じ込められており、虎眼とドクターの存在も確認できた。しかしこの球体は一体何なのかジンはサッパリ知らなかった。

その答えは、ジェットが教えてくれた。これは魔術の発展が生み出した人工冬眠保存機、通称「クーラーボックス」と呼ばれる魔具だと言う。この中に閉じ込められた生命体は、肉体の生命維持活動をギリギリまで低下させられ、人工的に冬眠状態にさせてしまう道具らしい。昔実際に行われた実験データによると、この中に入れられた実験サンプルは15年間眠り続け、目が覚めても肉体は衰えることなく15年前と何も変わらぬ姿で生き返ったとされている。

ジンはこのクーラーボックスを全てたたき割り、中で眠らされていた人々全員を解放させた。

目を覚ました虎眼とドクターは不意を突かれて被害者の仲間入りをしてしまったことを酷く悔しがり、虎眼はこの男を10発ブチ殴り、ドクターはメスで13か所切り刻んだ後麻酔無しでその傷口を丹念に縫うという地獄の痛みを味わせた。

見てはいられない悪魔の光景に目を背けていると、ここでようやく一つの違和感を思い出した。

「オイ根暗医者、あの馬鹿バンダナはどこ行った？」

「キシシ？ここにはいないようだが・・・君達と同行してたのではないのかい？」

その後海パンを逆さ吊りの拷問で無理にでも吐き出させようとしたが、男は逆さまのまま涙と鼻血と小便を漏らしても何も知らないと訴え続け、最初っからそんな男は知らないと言い続けた。全員を外へ開放し、手分けして探した結果、アゲートは雑木林の中・・・あの枯れた木の下にできていた空洞に落ちて目を回しているところを発見された。あの時アゲートがしゃべりながら一歩踏み出した途端、足元の腐っていた木の根が抜け落ちてその下にできていた大きなアリの巣のような穴に落ちていたようなのだ。

今回の事件において全く関係が無い被害の上に3人に迷惑をかけた罪は重く、アゲートは一瞬で見るも無残な、15歳以下は絶対に見てはいけない惨状と化してしまったのだった。

「いや～まさか本当に犯人を見つけてきてくれるとは思わなかったよお、アハハハハハハ！」

あれから情けとしてアゲートの治療を終えた後、犯人は村に人々に突き出され、海パン男はこの村の決まりに従って木の上に3日間吊るし上げられることとなり、浚われた人々は元の生活へ戻った。

一行は条件を物の数時間で満たしたことをあの宝石商の男に伝え、早速言っていた情報を貰いにきている。

「さぁ話してもらおうぞ。お前が知っている、俺達の探している宝石について・・・」

「アハハハハハハ・・・ああそうだったっけね？ハイハイ」

店員が笑うのをやめると、次にどんな言葉が情報として飛んでくるのかに期待を寄せて耳を傾けた。

「いやさ、オレが知ってる情報ってのはね・・・知らないってこと」

「・・は？」

5人な目を点にした。今んて言った？知らない？

「オレは、そんな変な宝石については何にも知らないってのが、オレがあんた達に与える貴重な情報ってわけ。オレはただの田舎で暮らしているしがない宝石屋だよ？そんな物知るわけないじゃん！アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！」

店員はヘラヘラと笑いながら答えると、カウンターの隅から煎餅を取り出してバリバリと齧りだした。

煎餅の齧る音と比べてば、今からなる音なんかきっと周りからは気にならないはずだろうと確信し、5人は動いた・・・・・・・・。

ゴシヤツ！！

バキツ！！

ボキン！！

ガキヤツ！！

ベキベキベキ！！

ドカンツ！！

ビチャアア！！

翌日、クォーツの村の宝石店から、人としての形を失われた男が重体で発見されるという情報が新聞に掲載された。

おまけ

名前 アゲート・モルガナイト

年齢／性別 24 / ♂

誕生日 6月24日（蟹座）

誕生石 オパール（健康、長寿、富）

レベル 45

性格 楽天的（早い話バカ）

職業 戦士

装備品 クレセントアックス 黒いベスト、ジャンパー

好物 温泉 甘いもの

嫌物 痛い系の話 ミント系

眼／髪 金、丸目／黒茶、ショート

身体的特徴 顔に大きな傷跡 額にバンダナ

イメージカラー 緑

楽器 ピアノ

備考 会話の語尾に「～さ」とつける（地元方言）

希望CV 佐々木望 上田祐司 森久保祥太郎 保志総一郎 坂口大助